

発 明 文 化 論

〈第 63 回〉

丸山 亮

儀 礼 の 進 化

合併して誕生した新日鐵住金は、職場のあいさつのしぐさも統一した。鉄鋼業界では無事故を祈る「ご安全に」のあいさつが敬礼によって交わされるが、合併前は製鉄所ごとにその仕方が異なっていた。たとえば旧新日鐵では右手の人さし指と親指で丸を作り、無事故の祈念をするところが多かった。一方、旧住金では世界の主流となっている右手の五指をそろえる方式だった。これは社員がドイツの鉱山を視察した時に見た風習を持ち帰ったものと言われ、それが今度の合併にもともなって全社共通のしぐさとなっている。

儀礼は人と人の付き合いのあるところに必ずと言っていいほど存在し、時代とともに変遷する。文化の体系の中で儀礼を重視した例としては、古代中国がすぐに思い浮かぶ。礼は儒教のなかで最も重要な道徳の観念とされ、中国のみならず周辺国にまで大きな影響を及ぼした。

足利幕府は義満の時代、長く途絶えていた中国との貿易を再開するが、それには中華思想に基づく華夷秩序を形式的にも受け入れ、皇帝の使者から国書を受け取るとき、臣下の礼を取ることを要求された。しかし明の皇帝の臣下となることには国内の公家たちが反発していたため、義満は巧みに儀礼の形式を変えた対応をしている。国書の受け取りでは北面するところを南面し、さらに5回必要とされた跪く礼を3回に減らすなど、明の臣下ではないようにも見える風に変えてしまった。こうして義満は儀礼の試練を無事通過し、明との勘合貿易にこぎつけることができたと言われる。

ロシアの女帝エカチェリーナ2世は、フランス啓蒙思想に深く共感し、ヴォルテールやディドロなどとの交流があった。また、古典古代のギリシャやローマのへのあこがれも強かった。その女帝がエルミタージュ宮殿の私室で開くパーティーの入り口には、来客の心得を箇条書きにしたものが掲げられていた。位階を示す被り物や刀剣類は一切持ち込まないこと、室内では陽気に振る舞い、他人の気分を害さないこと、着席し、席を立ち、歩き回るのは自由、議論は激高することがないように、提案されたどんな余興にも同意すること、よく食べ、節度を持って飲むことなどが挙げられている。今日のパーティー・マナーにも通じるものが、18世紀の末、ロシアの宮廷で確立していたことがわかる。

日本では室町時代から、武士の礼法が伝えられてきた。その代表が小笠原流で、立つ、座る、歩く、お辞儀するなどの立ち居振る舞いがきれいに見えるように洗練されていく。下腹に力を入れ、腰を落とし、体を上下させるなどの所作は能や狂言にも通じ、日本人の身体表現の基底をなしているのだろう。もっとも目に見える形の奥には、当然ながら相手を思う心や、慎みが必要とされる。

武家だけでなく、江戸には町人の規範となる江戸しぐさというものがあったらしい。気配りが対人関係の基本であることは武家の礼法に等しく、多くの人が和やかに共存できるしぐさや言葉使い、付き合い方が次第に形成されていったという。たとえば武士と町人が出会う狂歌や茶の湯のような社交の場では、年齢、職業、地位に触れてはならないとされていた。エカチェリーナ2世のパーティー会場との共通点が興味深い。

先ごろ公明党の山口那津男代表が北京を訪問し、習近平総書記と会談した際、安倍晋三首相の親書を手渡した。尖閣諸島問題で揺れる日中間の外交上の、重要な局面である。この時の様子をテレビで見ていると、山口代表は深々と頭を下げてお辞儀をしながら親書を手渡したのに対し、習総書記はまっすぐ前を見て平然としており、この落差に驚いた。対等であるべき外交の場で頭を下げるお辞儀が必要であったか。国際化が進んでいる今日、日本の外交儀礼のあり方を考えさせられた。

(まるやま りょう 共生国際特許事務弁理士)